

建築の一般趣向であることを論證せられてゐるあたり、法隆寺論争問題に嫌悪さへ感ずる者にとつては正にギリシヤ彫刻にも似て明るく氣持よいものである。又『日本美術史研究』所收論文が多種多岐であつたに對して本書には明確に一貫された美術史への態度と方向が看取されたのであるが、「感鑿考」は題名の如き特殊な玉器を取り上げられて石器と玉器との關聯を論考した一論であり、其の外上述紹介した關係論文以外のものも二三收められ何れも興味深いものがある。

先生が總長就任直前まで講ぜられたさきの「東亞古美術綜説」を聽講し得た自分は、今本書に收められたそれを活字の上にも再讀した時、あの時と同じくそのすぐれた感覺と豊かな文才により創作された作品に對する如く所論の明快さに魅せられたのである。然しそこにこそ學ぶものにとつては大きな陥穽があることを看過してはならない。先生の學風に魅せられるがまゝに私淑して易々としてその道を迎へる時先生の背後にかくされた陥穽に陥るのではあるまいか。先生の學は破綻なき才と感覺の學である。それだけに資料の學を學ぶ者は先生により完成された先生の學問を先づ批判せねばならない。そこにこそ先生の學問の眞にして忠實なる理解があると思ふ。そのことは又その著作が今日の吾々に對して有するモニュメンタルな意義と價値を示す所以である。

要するに東洋美術史研究はギリシヤ美の感覺もて支那古美術品に對されたのであるがその點先づ今日に於いては大きな問題が見出されるわけである。文中に排されてゐる三代の古銅器に支那古

代美術精神の凝縮したものを追究する今日に於いては。(定價七圓五拾錢 庶右發行會發行) (澄田正一)

彙報

昭和十七年十月史學科講義題目

正科 目

國史

普通 西田教授 國史概説(第一部) 二

中村助教 國史概説(第二部) 二

特殊 西田教授 國家と歴史 二

藤助教 中世の社會 二

柴田講師 神道史の諸問題 二

東伏見講師 飛鳥奈良時代の文化 二

魚澄講師 室町時代の文化 二

吉田講師 日本近世史の特殊問題 二

藤井講師 明治維新史 (一〇〇) 一

實習 藤助教 日本教學史の問題 一

演習 西田教授 日本文化史の問題 二

東洋史 那波教授 東洋史概説(第一部) 二

宮崎助教授	東洋史概説(第二部)	二
特殊 那波 教授	開元禮と太常因革禮との比較	二
宮崎助教授	宋代中期以後の通貨問題	二
田村助教授	清朝治下に於ける蒙古の政治形態	二
石濱 講師	蒙文史籍研究	二
鴛淵 講師	清代滿鮮交渉史	(二〇〇)
内田 講師	北魏を中心として觀たる南北朝の社會	二
外山 講師	金代中期の政治と社會	二
講讀 宮崎助教授	文 史 通 義	一
田村助教授	二十二史劄記	二
演習 那波 教授	敦煌發見文書の研究	二
西洋史		
普通 原 教授	西洋史概説(第一部)	二
鈴木助教授	西洋史概説(第二部)	二
特殊 原 教授	希臘史學史	二
鈴木助教授	中世文化の性格と諸相	二
井上 講師	古代世界の成立	二
中山 講師	帝政獨逸の世界政策	二
前川 講師	十八世紀佛蘭西史	二
村田 講師	エーゲ文明	二
岡島 講師	回教文明(三月まで)	二
講讀 井上 講師	獨逸史學思想	二
演習 原 教授	古代史の研究 近世外交史の問題	二

史學研究法		
普通 原 教授	史學研究法	一
地理學		
普通 小牧 教授	地理學通論(第一部)	二
野滿 教授	地理學通論(第二部)	二
特殊 小牧 教授	日本地政學	二
小野 講師	アメリカ地誌	(二〇〇)
室賀 講師	政治地理	二
松井 講師	地理學方法論	(二〇〇)
小牧 教授	獨逸地理書講讀	一
室賀 講師	佛蘭西地理書講讀	一
實習 野間 講師	地理學實習	二
演習 小牧 教授	地理學の諸問題	二
考古學		
普通 梅原 教授	日本考古學概説	三
特殊 梅原 教授	日本歴史考古學の諸問題	二
村田 講師	エーゲ文明	二
講讀 水野 講師	支那考古學關係書講讀	二
實習 梅原 教授	考古學實習	二
演習 梅原 教授	東亞考古學の諸問題	二
日本精神史		
普通 西田 教授	日本精神史總説	二
高山助教授	中世思想史(前學年の續き)	二

副科目

國

露西亞語

史

伊吹講師 小林龍雄編 Contes d'Aur-Jourd'hui (第二回) 二

中村助教授 日本古文書學

八杉貞利編 訂正增補初等

藤助教授 史籍講讀

ロシヤ語文法 八杉貞利編 露語新讀本卷 (第一回) 二

赤松講師 古代神事の研究

之(露)字新集 露字新集 (第二回) 一

人類學

金關講師 人類學概論

露字新集 (第二回) 一

教育學教授法

木村教授 教育學序說

伊太利語

黒田講師 伊太利語初歩 (第二回) 二

美術史

源 講師 室町時代の美術

Maraini講師 伊太利語 Grammatica italiana (第二回) 二

英語

中西助教授 Arnold: Selections

西班牙語

Vaccari: Grammatica italiana (第二回) 二

獨逸語

一柳講師 English Short Stories

支那語

國澤講師 西班牙語 初歩 (第二回) 二

石川講師 a) 粕谷眞洋編 Kleine deutsche Schulgrammatik

倉石教授 支那語發音入門 (第一回) 二

b) Carossa: Eine Kindheit, Nietzsche: Vom Nutzen und Nothheit der Historie für das Leben

倉石中等支那語卷一卷二 (第二回) 二

大山講師

倉石中等支那語卷三卷五 李健普「十二年」 (第二回) 二

佛蘭西語

田島清編 新編佛蘭西語教科書

梵語

足利助教授 梵語文法 (第三回) 三

林 講師 直木直明編 「アナトール・フランス」我が友の書

希臘語

(第一回) 二

田中教授 Tanaka: Graecae Grammaticae Rudimenta (第一回)二

松平講師 A Greek Reader (第二回)二

田中教授 Euripides: Iphigenia in Tauris (大學院)一

羅甸語

田中教授 Tanaka: Nova Grammatica Latina (第一回)二

松平講師 Via Latina (第二回)二
ラテン選文集

田中教授 Plautus: Trinummus (大學院)一

昭和十七年九月卒業者史學科卒業論文題目

國史專攻 一五名

近世文化の一考察

國學の發達と其の世界性及び其の意義

安土桃山時代の精神考察

吉田松陰の研究

親鸞思想の特異性と其の史的考察

聖太閤の基督教政策と其の精神

近世初期に於ける國體觀念の展開

鎌倉時代に於ける武士と念佛宗

中世初頭に於ける統一者の問題

——法然佛教を中心として——

有坂隆道

石澤 澈

石田修一

岩本深志

梅原隆章

押野慶麿

金井泰樹

佐々木利秋

定 豐 穂

新日本建設の序幕と日本主體性の確立 西田 忠夫

——尊皇攘夷論の問題——

近世復古的精神の展開に就いて 本庄 宗正

——近世に於ける我國の歴史的自覺に關する一考察——

「愚管抄」考序説 眞坂 忠之

近世初頭に於ける都市の一性格 松井 迪夫

藤原時代の貴族精神 水谷 剛雄

北畠親房の時代 宮脇 信久

東洋史專攻 四名

唐代に於ける黨項の發展

明代の鈔法について

五代禮の一考察

高句麗の社會

岡崎 精郎

小林 義武

佐藤 圭四郎

中西 均

西洋史專攻 四名

ストア派に於けるコスモポリスについて

シュタインの國家思想に就いて

Encomium Moriae の性格とその史的意義

十九世紀以後英國海軍の歴史的性格

市川 承八郎

定本 眞一

植村 雅彦

八丁 敏臣

地理學專攻 二名

蒙古 古 日本地政學的考察

石田 寛

印度洋について

今井次男

考古學專攻 二名

東亞の史前土器

井上常三

その序章として北支那彩色土器を中心とする二三の考察

古代東亞文化の一側面

及川幸夫

——特に馬具を中心として——

史學研究會大會

秋の學界を飾る本會大會は、菊花蕙る十二月二十一・二十二日の兩日、文學部各科研究會第九回聯合大會の一として舉行せられ第一日は公開講演會、第二日は見學會として、本年は近江神宮參拜、社寶拜觀、園城寺拜觀を行つた。

講演會 二十一日(土)午後一時より樂友會館講演室に於て關催東京帝大より迎へた新進氣鋭の山本達郎助教授と本會評議員西田教授とが次の講演を行つた。講演室北側には西田教授講演資料たる屏風三面をたて、會場に壯麗さを加へた。來會者二百數十名椅子に不足を告げるといふ盛會であつた。

タイ國及びビルマの古史に關する二三の問題

東京帝大助教 山本達郎氏
都市の發生と都市生活の藝術

本會評議員、京都帝大教授文學博士 西田直二郎氏

右の二講演は追つて本誌に掲載の豫定である。なほ講演室に展觀された屏風は左記の三面である。

一、賀茂鏡馬之圖六曲屏風一雙 京都市 末次 喬氏藏

一、大阪城之圖六曲屏風 半双 京都市 林 喜 作氏藏

見學 二十二日(日) 時雨の多い湖國の秋には珍らしい絶好の

秋日和。午前九時、近江神宮に參集、一同揃つて神宮に參拜後、

社務所に於て左記の大津京出土品を拜觀し、十一時晝食の爲琵琶湖ホテルへ向ふ。

一、崇福寺塔出土舍利容器並莊嚴具一式

一、同 陶視

一、同 白磁水差

一、同 陶椀

一、同 皇朝十二錢

晝食後百名を越える一行は園城寺圓滿院に至り、午後二時より同院宸殿廣間に於て宮城信雅氏の園城寺並びに展觀品に關する講話を聞き、終つて參會者多數の爲二班に分れ、園城寺内圓滿院・勸學院・先淨院・其地の殿舎・襖繪・庭園等の拜觀と圓滿院に陳列された展觀品の見學とを交互に行ひ午後三時半解散して隨意歸途についた。當日展觀された主なものは左記の如くである。

一、後醍醐天皇宸翰御消息(國寶) 一幅

一、後光嚴天皇宸翰御消息(國寶) 一幅

一、後陽成天皇宸翰 龍虎二字 一幅

一、圓珍度祿並公驗(國寶) 一卷

一、顯珍位記(國寶)

一卷

一、圓珍真言學頭補任狀(國寶)

一卷

一、圓珍法眼和尚位々記寫(國寶)

一卷

一、圓珍傳燈大法師位々記(國寶)

一卷

一、越州都督府並尚書省司門過書(國寶)

一卷

一、國清寺求法目錄(國寶)

一卷

一、圓珍台州公驗(國寶)

一卷

一、太政官給公驗牒(國寶)

一卷

一、官宣旨寫(國寶)

一卷

一、最澄台州公驗

一卷

一、難福圖 應舉筆(國寶)

三卷

一、波雁圖 應舉筆

一幅

一、四條橫納涼圖草稿 應舉筆

一幅

なほ本會の爲に今回の見學を快諾され、種々便宜を與へて戴いた
近江神宮及び園城寺當局に對し厚く御禮申上げる次第である。

例會 十月三十日(土) 午後一時半より史學科第一教室に於て
左の講演を行った。來聽者堂に滿つ。

歴史的實存と實存的歴史

本學助教 高山岩 男氏

ギリシヤ史學の形式

本會評議員 本學教授 原 隨 國氏

原教授の講演は本號に、高山助教の講演は次號に掲載せられる
豫定。

讀 史 會

例會 九月十六日(水) 午後一時より、陳列館第二教室に於て
卒業論文發表會を開き、石田修一、水谷剛、石澤澈、梅原隆章、
定興種諸君の論文梗概を聞く(卒業論文題目参照)。終つて席を改
め貴船ひろやに於て卒業生饗餞會を開催し、西田教授、藤助教
柴田講師以下約四十名出席して、午後九時盛會裡に解散した。

例會 十月二十三日(金) 午後五時より、南禪寺正因庵に於て
國史新專攻學生歡迎會を開催。新舊讀史會幹事の引繼、自己紹介
等あつて午後九時散會した。出席者西田教授、藤助教、柴田講
師、東伏見講師以下約四十名。

例會 十一月二十四日(火) 午後六時より樂友會館第六號室に
於て開催。西田教授、藤助教、柴田講師、東伏見講師以下約三
十名出席し、學生幹事の紀州熊野見學旅行報告、及び左の研究發
表を聞いて九時閉會した。

- 一、石門心學に關する一考察 三回生 野田好太郎君
- 一、近世儒學の獨立に就いて 藤谷 俊 雄君

讀史會紀伊熊野地方秋季見學旅行記

かねて讀史會に於て計畫されながら實現をみなかつた紀伊熊野
地方聖蹟靈地の見學旅行は、御稜威の下賤泉彌々擧るの秋國史
科新專攻學生を迎へて種々の困難を排し決行する事が出来た。例
年國史科新二回生の親睦を兼ねて春期行はれたのが學制の變改に

伴ひ爽涼の秋催されたのである。神話傳説も尊く瑞氣あふるゝ聖蹟、深山寂として聲なき幽邃なる靈場を拜しては、今更ながら神國の悠久なる歴史と傳統とを自省して新しき國家意識を強くすると共に、國史學への挺身の徒として少からざる啓發を受け、大なる收穫を得たのであつた。

第一日(十月三十日)——熊野坐神社

西田・藤南先生以下先輩・學生二十數名は六時五十二分、朝霧にけむる京都驛を出發。省線及城東線にて南海天王寺驛着。此處で大阪からの人々も合流して、三十餘名の大部隊は八時十分天王寺發の南海電車により一路紀伊へと南下した。次第に霧は晴れて秋の陽は爽かに照り映へ南紀の秋は今甞である。東和歌山驛にて東伏見先生御乗車の列車を迎へ一同これに乗換へる。やがて車窓を通して紺碧の紀伊水道が鮮かに浮んで來て、熊野御幸に由緒も深い千里の濱も昔ながらに渺々たる眺を現す。車中持參の辨當に談笑の一時を過し、十二時四十分朝來着。直ちに二台のバスに分乗し、秋色豊な富田川峡谷に沿ひ延々と曲折する狭道をバスは巧に縫つて行く。途中湍尻・近露等熊野王子社の名残りの跡に、熊野御幸のありし日の光景を偲びつゝ、行くこと四時間餘、十七時近く湯の煙ほのぼのとあたりを満つる湯の峯温泉東屋旅館に到着。此所で十津川經由既に先着してゐた柴田先生一行を交へ、旅館にて輕装となつた一同は、再びバスに乗つて山間を行く事十分餘。山深く暮れやすい秋の日の事として、夕間迫る頃本宮熊野坐神社に到着する。本社は古來朝廷の尊崇篤く、上は上皇より下は庶

民に至る迄所謂蟻の熊野詣りとて參詣の跡絶えざりし熊野三山の一である。一行を代表して西田先生が玉串を奏奠し、一同肅然として拜禮する。明治二十二年の水害により社殿及社寶は殆ど流失し、家津御子大神を祭る第三殿の御本社を含む上四社のみ明治二十四年現在の地に遷座再建されたとの事で、茅葺白木造の社殿は尊嚴の氣漲る建築であつた。又現在の社殿は數度の大火により、亨和年間造營の際の建築様式に依つてゐるとの事等神官より説明があり、次で社務所に於て史料を拜見した。その一斑を左に記する。

一、熊野山本宮機現御修理之目録

一、孝明天皇御沙汰書(異國擊攘祈願の事) (嘉永六) 一通

一、熊野本宮井詰末社園繪(天保頃のもの) 一枚

再び闇夜の山道を旅館に戻る。かくて暮れゆく秋の温泉宿に一夜の情趣を味ひ、西田・藤南先生の神武天皇御聖蹟や熊野王子に關する含蓄ある御話に耳を傾けつゝ食後のひと時を團欒し、見學旅行としての面目を發揮して和氣霽々たる雰圍氣の裡に寝についた。

第二日(十月三十一日)——熊野速玉神社・神倉神社・阿須賀神社等

山中の朝はほのぼのと明けて今日も快晴である。湯の峯に別れを告げて本宮の舊社地を一巡し、清冽明眉なる熊野川畔に到着。プロペラ船二隻に分乗して、八時過岸を離れる。澄み切つた清流その兩岸の或は迫り或は遠くひらけた山肌には艶やかな紅葉が秋日に照りはえてゐる。中に一すぢ遠白くかよる飛瀑を交へてえもいはれぬ絶景は、「熊野川くだす早瀬のみなれざをさすがみなれぬ

浪のかよひぢ」と詠し給うた後鳥羽上皇の御製そのまゝに、すが
 ぐしい秋の冷氣を一杯に吸ひながら、二隻の船は追ひつ追はれ
 つ南下すること二時間餘にして新宮に到着する。船を捨てた一行
 は、徒歩にて直に熊野速玉神社に参拜する。こゝも本宮と同様の
 形式で上四社を始め、中四社下四社の社殿を拜するが、もとの
 社殿は明治十六年の火災により神輿庫寶藏を殘して總て烏有に歸
 した爲同二十七年現在の如く再興されたものである。併し當社に
 は社寶の現在する物極めて多く、その中國寶に指定されたものは
 實に百五拾點餘に達してゐる。参拜の後宮司の御案内で先づ神輿
 庫に入り、毎年十月十五日の例祭につゞき、翌十六日熊野川渡御
 の御儀に用ふる明德三年足利義滿寄進の紫漆金銅裝神輿一基、同
 じく丹塗の神幸用船を仔細に觀察し、その祭禮の日の概略の様子
 を興味深く聞く。殊に後者は龍頭の舟として、現存する唯一のもの
 のなる事を知り興趣は一段と深められた。次で境内の一隅にある
 寶藏に入り、左記の如き貴重なる史料をまゞぐと見學すること
 が出來た。

- 一、後村上天皇繪旨 (正中五・十・九) 一通
 - 一、熊野別當代々之次第 (天仁・元・五・十) 一卷
 - 一、第一代快慶(弘仁・三)より第二十八代尋快(正嘉・二)まで
 一、院廳下文 (建曆二・二二) 一通
 - 一、足利義隆下知狀 (文和四・八・二九) 一通
 - 一、平家奉加帳 (年月缺) 一卷
- 前武藏守宗清外數十名連碧花押あり、足利時代のものか。

一、蒔繪櫛笄、金銅裝鳥頭太刀、蒔繪平胡篋皆具、彩色楯扇、
 海賦裝等。

三十數名の眼は一瞬學究的な輝きを帯びて一物も疎かにせじと忙
 しく彼方此方に吸引され、かくて約二時間に亘つて一覽し終り、
 厚く謝して辭去する。新宮市中を通り、驛前にて晝食後十三時半
 徒歩にて五百數十段の石段峻しき神倉山に登る。神話の傳へる處
 神武天皇が御登臨遊ばされた天岩櫛は此の山といはれ、又高倉下
 命が御靈劍を得た聖蹟であるとも傳へられてゐる。現在頂上の
 數十丈からなる岩櫛に、繩をはつて攝社神倉神社の御本體として
 ゐる。こゝよりは一望千里茫茫たる太平洋が眼下に連り、げに雄
 大豪壯の絶景である。しばし低廻去る能はず下山後更に市中闊澤
 浮島植物群落なる天然記念物寒生小蘇沼地に立寄り、それより阿
 須賀神社に詣でる。此の邊は神武天皇熊野神邑の御聖蹟で眞新し
 い石碑が立つてゐた。社殿の後には鬱蒼たる所謂蓬萊山があり、
 秦の始皇を思ひつゝ近くの徐福の墓に立寄り、十六時三十分新宮
 發汽車にて黒潮躍る南の海に憧れの眼をそゞぎつゝ、三十餘分に
 して那智を過ぎ、早や薄霧の中に淡い電燈の光明滅する勝浦に到
 着。漁村と温泉の香の交錯する港町を通つて越之湯旅館に入り、
 折から警戒管制中の戦時下らしい空氣の中に第二日の日程を終つ
 た。

第三日(十一月一日)——熊野那智神社・青岸渡寺

月變つて十一月となる、朝來旅館の庭石をしとくとたゞく秋
 雨も温泉情緒を添へて一しほである。海岸の露天風呂に旅の疲れ

を癒しつゝ漸く淡い旅愁を覺える。八時五十五分勝浦發。那智驛からはバスにゆられて紆餘曲折の山路を登ること三十分。靈地那智の峰々は雨に濡れて一際莊嚴さを加へ晩秋の色も濃い。那智瀧を右手に見つゝ九時五十分那智山着。そぼふる雨をついて熊野那智神社へ詣る。丁度朔日の例祭執行中なので、その間社務所に於て彫しい數の古文書を見る事が出来た。

一、新田義國寄進狀 (仁平元・二・十五) 一通

一、鎌倉御所久明親王御教書 (正和・三・七・十) 一通

一、金輪聖王萬燈寄進狀 (嘉曆二・二・八) 一通

一、某親王令旨 (康永二・二・十) 一通

一、忠義王祈願文 (乙亥・七・六) 一通

一、足利尊氏御教書 (曆應元・二・五) 一通

一、足利義教御教書 (嘉吉元・四・二二) 一通

一、島津龍伯書狀 (一六・七) 一通

等その一斑である。やがて一同社頭に額付き拜禮を濟ませる、此處も熊野三山のひととして、前の二社と同様熊野夫須美大神伊弉册尊を祀る第三殿の御本社を中心に、都合六殿あり、第六殿には即ち中四社・下四社を合祀してあるとのことであつた。但前の二社と異なる點は全社眞新しき朱塗であつて、その華嚴音はん方なく、ついで當社に隣接する西國三十三所第一番の札所たる青岸渡寺に向ふ。單層入母屋造柿葺にして秀吉が天正十八年に再建せりと云ふ桃山時代色濃き國寶の如意輪堂(本堂)とその前方同じく秀吉の奉納した大鯛口に眼をみはりつゝ、住職の御好意により先年瀧附

近より出土の佛像五體を我々の前に並べて種々の説明を加へていたゞくことが出来た。此處を辭去して晝食を濟せ下山の途次那智瀧に寄る。直下八十丈火燵四方に立込める扶桑第一の名瀑に驚嘆の聲を放ちつゝも時間切迫の爲一瞥したのみにて再びバスの人となる。十四時十四分那智發の列車に乗り湯川捕鯨で名のある太地、歌で名高い串本を過ぎ大島や紀の松島を賞しつゝ、かくて豫定のコースを恙なく終り白濱口驛に着いたのは十七時十八分。こゝで一應解散した一行は二班に分れ、西田先生以下十數名はそのまゝ一路歸途につき、藤先生以下残りの者はバスにてとつぶり暮れた南紀の夜を白濱温泉へと向つた。(佐々木記)

第四日(十一月二日)―道成寺・施無畏寺・勝樂寺

藤先生を始め十六名は一夜を白良莊の客となつて、白濱の湯に熊野三日の旅の疲れを癒す。朝來の颯風は昨日からの雨氣をすつかり吹きはらつて快晴である。白い波頭がおさまると海は南國らしい色をたゞへてきら／＼と光る。九時過ぎる頃此處を出發し途中道成寺に下車する。安珍清姫の傳説に親しい寺は驛から程近い。我々はあの六十二段を踏んで國寶仁王門をくぐると、すぐ室町時代の國寶建造物たる本堂に直面する。本堂は七間五面の比較的すつきりとした感じの良のお堂であつた。藤原の優作と云はれる本尊千手觀音は御開帳して頂けなかつたが、脇侍の一つ日光菩薩は弘仁から藤原への過渡期のものと見てよいだらう。其他國寶になつてゐる四天王立像と、珍しい兜鍪形毘沙門天などを見學したが、更に巨大素朴な彫法の中に何處となく優しさを持つた阿彌

陀坐像と脇侍立像二軀は、何かしら割り切れない異様なものを我々に感ぜしめた。結局は藤原的な感覺の中に、地方的な雅拙さが現れたものであらう、などといふ意見が出る。次で庫裡に案内を乞ふて名高い道成寺縁起二巻と千手千眼陀羅尼經一卷を拜見する。前者は後小松天皇の宸筆と傳へられる極めて秀麗な詞書に始り、描線や色彩も割に趣味のないさつぱりした繪であつた。この詞書は、おそろくその書風から考へて從來の所傳も肯定すべきものであるかと拜された。卷末には足利義昭の花押と「右此御判者御公方様天正元年十二月日聖興國寺被移御座節此縁起爲御所望之間即懸御目御感不斜可爲日本無雙之縁起時代廻時觀見不思議也。被出仰未代之御祿被印御判特別當永叶御盃相添御太刀一腰御馬一疋下給候而已」なる奥書を有してゐる。本縁起によれば物語の時代は醍醐天皇の御宇延長六年八月、人は熊野に參詣する奥州の目よき僧と紀伊國室の郡真砂の清澤庄司の妾となつてゐた。後者は色紙墨書元久二年三月加點の奥書があつた。午後は湯淺に再び下車し丘一つ彼方の施無畏寺を訪ふ。梅尾明恵上人の遺蹟、白上峰を後に前は風光明眉の湯淺灣に臨んでゐる。暖い南國の日ざしの下に僅かの時間を利用して次の様な文書に接する。

- 一、明恵上人行狀記
- 一、如來遺跡講式
- 一、十六羅漢講式

共に「建保三年正月二十二日衣剋草此式畢沙門高辨」の奥書あり。

- 二卷
- 一卷
- 一卷

一、施無畏寺文書 第一

- (1) 紀直孝外二名連畧田地賣券 (嘉祿二・八・十二) 一通
- (2) 僧性寛置文 (延慶三・二・十五) 一通
- (3) 沙門良範置文 (貞和三・六) 一通
- (4) 某寄進狀 (明應九・九・十八) 一通
- (5) 沙彌行惠忌日田寄進狀 (正平二・三・三七) 一通
- (6) 實尊外十二名連畧置文 (建徳元・十一・二) 一通
- (7) 平盛忠外二名不斷法花三昧料田寄進狀 (應永十三・十一・十五) 一通
- (8) 藤原宗信寄進狀 (文明三・四・三) 一通
- (9) 藤原宗信寄進狀 (文明三・四・三) 一通
- 一、施無畏寺文書 第二
- (1) 江河禪正入道覺圓寄進狀 (文安三・卯・五) 一通
- (2) 良秀寄進狀 (永徳元四・二十五) 一通
- (3) 施無畏寺向坊以下連畧下地賣券 (永祿六・十二・十) 一通
- (4) 道秀寄進狀 (永和四・五・十一) 一通
- (5) 心見賣券 (貞和三・十・十三) 一通
- (6) 沙彌須惠寄進狀 (康永二・六・二十) 一通
- (7) 尼心蓮寄進狀 (嘉曆二・二・二十九) 一通
- (8) 藤原泰安寄進狀 (元亨四・五・二十三) 一通
- (6) 沙彌行惠寄進狀 (正和二十・十九) 一通
- (10) ちしやう寄進狀 (嘉元三・二・五) 一通
- (11) 澄祐田地賣券 (延慶二・二・二十一) 一通

- (12) 沙彌西佛證狀(前缺) (正安二・五・一) 一通
 - (13) 行惠田地賣券 (正平二十四・十・二十七) 一通
 - 一、施無畏寺文書 第三
 - (1) 地頭僧宗辨寺田注文 (弘長二・三) 一卷
 - (2) 地頭僧宗辨寄進狀 (建治三・六・十八) 一通
 - (3) 左中將奉令旨案 (延元三・三・二十一) 一通
 - (4) 前上總介令旨案 (延元三・三・二十一) 一通
 - (右二通文書の形式に疑を存す)
 - (5) 施無畏寺重書紛失狀 (延元三・四・二) 一通
 - (6) 沙彌某寺領寄進狀 (應永九・二・二十四) 一通
 - (7) 同右 (應永七・五・十) 一通
 - (8) 施無畏寺々領目錄起請文 (明德三・十一・二十七) 一通
 - (9) 沙彌某豐後守某下知狀 (明德三・十一・三十) 一通
 - 一、施無畏寺文書 第四
 - (1) 秦重安見分下地書 (天正五・九・吉) 一卷
 - (2) 衛門五郎寄進狀 (天正二十二・卯・八) 一通
 - (3) 賢泉房寄進狀 (天文二十一・十二・十三) 一通
 - (4) 施無畏寺々領賣券案 (天文十九・二十八) 一通
 - (5) 藤原則宗田地返附狀 (明應元・十八) 一通
- つるべ落しの秋の日に心せかれて驛近くの勝樂寺に急ぐ。此寺の由緒は餘り明かでないが附近に西門阪・大門等の地名ある事から宏莊な舊伽藍の規模を推定し得ると住職は説明される。藤原から鎌倉の八軀の佛像が定評ある須彌壇に並んでゐる。本尊阿彌陀を

中心に薬師と釋迦の坐像、四天王の立像の他に地藏菩薩坐像一軀は豊かにも慈悲のあふれた秀作であつた。すつかり暗くなつた頃、久しき待望の紀伊熊野見學を無事に終り、過ぎし旅の收獲と追憶を胸に車中の人となつて歸洛の途についた。

最後に本旅行中種々の御便宜をお計り下さいました諸社寺、新宮市役所の方々にこゝに改めて厚く御禮申し上げます。(岸記)

東洋史談話會

今西春秋氏歡迎會 事務打合せの爲當地に出張され來つた會員北京大學教授今西氏を迎へて、八月二十四日午後一時より樂友會館に歡迎座談會を開く。現地の現状に就き各種の報告を得たが何れも興味深いものであつた。

昭和十七年度卒業生送別會 九月十五日午後六時より樂友會館に於て本年度卒業生送別會を開く。岡崎・小林・佐藤・中西四君より夫々卒業論文作製に就ての苦心談あり。

神田喜一郎氏歡迎會 内地出張中の臺北帝大教授神田氏の入浴を機として十月十日樂友會館に歡迎會を開く。當日那波教授以下多數の出席者あり頗る盛會であつた。

新講師歡迎會 十月十三日午後六時より樂友會館に於て開會、新學年度より特殊講義の擔任に當る内田・外山兩新講師を中心に兼ねて新專攻生の歡迎會を開く。那波教授・宮崎・田村兩助教授以下、三十餘名を算する多數の出席者を得て甚だ盛況裡に會を終つた。

第五回例会 十一月十七日午後六時より樂友會館に於て開催、
本大學哲學科に出講中の東方文化學院研究員牧野巽氏の左の講演
を聴く。

朱子家禮の宗法主義

牧野 巽氏

故見習士官柳田陽一氏追悼會 昭和十六年十二月本學東洋史學
科を畢へ、翌十七年二月入營、引續き千葉防空學校に入學中の柳
田陽一氏には、去る十月一日、公務に殉じらる。因て本會に於て
は故龜川大尉の例に倣ひ、クラスを共にせし善峰・間島兩君以下
を委員とし、十一月二十日午後三時より、百萬遍知恩寺山内了蓮
寺に於て追悼會を催し、以て故人の英靈に哀悼の意を捧ぐ。當日
先輩塚本善隆氏導師となり、遺族の燒香に續いて談話會々長那波
教授祭詞をさしげ、宮崎助教以下參列者一同の燒香に移り、終
つて別室に追憶座談會を開く、六時散會。

第七回大會 十一月二十三日午後零時半より樂友會館講演室に
於て開催、宮崎助教の開會の辭に始まり、田村助教・小川講
師の司會の下に、左の十三氏の研究發表あり、終つて那波教授閉會
の辭を述べられ、午後五時半過ぎ盛會裡に解散。引續き晚餐會を
矢尾政に開催。多敷の遠方よりの講師賓客を集めること講演會に
同じ、出席者那波教授以下四十餘名、近來にない盛況であつた。

一、五代沙陀舊俗考

岡崎 精 郎

一、宋代に於る僧官の性格

泉 孝 順

一、回々館譯語とその國際性

田坂 興 道

一、清朝・李朝の王族と天主教

赤木 仁 兵衛

一、唐初の名族太原王氏世系考 守屋 美 都雄

一、清朝時代の政治の一考察 北 山 康 夫

一、安南黎朝田制の一考察 山 本 達 郎

一、世說新語に現れたる個性について 村 上 嘉 實

一、不空三藏の天竺渡航について 長 部 和 雄

——特に「付法傳」の史料的价值 山 本 守

一、太祖阿保機の設置せる歸州の方位について 日 野 開 三 郎

一、清廷薩滿教の祭神について 井 上 以 智 爲

一、龔定庵の蒙古學 石 濱 純 太 郎

東方文化研究所創立記念講演

十一月八日、創立第十四回記念日を迎へた東方文化研究所では
同日午後一時より同所講堂に於て記念講演並びに展覽會を左の如
く開いた。

一、隋代曆法史概説 研 究 員 鏝 内 清

一、晋代音樂考 東 方 文 化 學 院 研 究 員 瀧 遼 一

一、唐代の農田水利に關する規定に就きて 評 議 員 那 波 利 貞

三氏の講演の外に神田氏寄託本・同所新得善本の展覽あり。

西洋史讀書會

新專攻生歡迎會 十月七日 於樂友會館

出席者 原教授、鈴木助教、井上・中山・前川各講師以下新專
攻生五名を加へ十九名。

十周年記念大會 十一月三日午後一時より於樂友會館。出席者
講演會百二名、晚餐會四十二名。

大東亞戰下初の明治節、見事な秋晴の日に一しは意義深く讀書
會十周年記念大會は開催された。仙臺、東京、廣島、九州の各大
學より來賓あり、定刻前既に聽衆堂を埋める中を原先生先づ立た
れて「歴史的眞實なる題目のもとに講演され來會者に多大の感銘
と示唆を與へられたが引つゞき各講演者は深き學識の一端を洩ら
されたのである。

晚餐會は六時より開催、食事は相變らず情ないもの乍ら、祇園
寺、倉橋、池田、酒井、中原の各來賓先輩よりのお話あり、和氣
溢る、内に八時半散會。
講演内容左の如し。

- 一、歴史的眞實 挨拶に代へて 原隨 園先生
- 一、中世初期の聖人崇敬の變貌 水川 温 二氏

中世の基督教徒にとつて異教徒との抗争は異教を奉ずる人間と
の闘ひではなくして正に惡魔そのものとの戦争であつた。この戦
争に勝つ爲には天軍たる天使並びに聖人達の姿なき加勢が無けれ
ばならない。殊に現世に於ける惡魔との戦に最後まで耐へ得た聖
人達の指導と庇護を仰がねばならない。歐洲が異教徒の侵略に曝

された第六世紀頃から護國的戰士的な殉教者達への崇敬が盛んに
なり、第八・九世紀に至つて益々熱狂的となつて、反つて種々の
弊害さへ現れるに至つた事は決して偶然ではない。そして、郷土
的地方的な崇敬の對象であつた聖人達が遠隔の地に於ても同じ様
な崇敬熱を高めて行く所に、異教世界に對抗する基督教世界の共
同意識の強化の跡を迎える事が出来ると思ふ。

一、歴史と宗教

——アウグスティンを中心として——

井上 智 勇氏

現實世界の世界史性は歴史研究の世界史的把握の必要と共に、
世界史意識の史的發展を反省せしめる。

近世の世界史意識は歴史の世俗化に出發する。然らば中世的ク
リスト教的世界觀は如何なる世界史意識をもつてゐたか、それは
又古代的世界史意識に對して如何なる關聯に立つか。さうした問
題を中世的世界史觀の樹立者アウグスティンの歴史思想を通じて
考察してみたい。この際私の中心問題は、アウグスティンに於け
る一、歴史的空間、二、歴史的時間、三、歴史理念の三點であ
る。詳細は西洋史說苑第二輯を参照されたい。

一、中世商業の性質について

鈴木 成 高氏

中世商業の性質についてはそれに従事する商人の性質、取扱は
れる商品の性質、經營の性格、規模、流通の範圍など可成多方面か
ら考究される必要があるけれども、その主眼點は單に商業の有無

や或はその状況だけでなく中世の全經濟秩序の中において商業の占める地位を決定することに存しなければならぬと思ふ。ピッチャーの段階説以來、中世の經濟秩序の本體は自給自足的なる莊園經濟或は生産者と消費者とが直接結びれて中間商業の介在を許さないやうな都市經濟に置かれて、商業の全經濟秩序に對する眞に構成的な意味は認められてゐない。このやうな立場においては、中世には地域的な局所經濟が考へられるのみで歐洲全體を一つの經濟的聯關において考へようとする全歐的經濟なるものは考へられないのである。斯かる考へに對して最近に於ける遠距離通商の研究の進展は、單に中世商業の一部門に關する研究の進展といふだけでなく、全經濟秩序の概念を改めしめ、且つ中世の全歐的經濟の成熟の基礎の上において近代の資本主義經濟や植民經濟の發展を理解せしめるところがある。即ち遠距離通商の研究の進展は單に中世商業の性格の閉却されてゐた一面を明瞭にするのみでなく中世の經濟秩序の概念を變革せしめつゝある點において特にその成果が注目されねばならないと思ふ。

一、タキトウスのゲルマーニア著作目的に關する一考察

三喜田熊藏氏

現代吾等の同盟國として米英のみならずソ聯を向ふにまはして勇戰奮闘しつゝある獨逸は、古代のゲルマーニーの血を最も純粹に保有してゐる民族である。彼等の現に發揮してゐる幾多の優秀卓越せる民族の素質と同時に其の缺點と思惟せらるゝものまで、遠く彼等の民族的祖先たる古代のゲルマーニーから繼承せる歴史

的成果で、一朝一夕に出來上つたものでない。この古代ゲルマーニーの全生活、その躍動せる生命を如實に後世に傳へ獨逸民族の最高の古典として仰がるゝものは、實にタキトウスのゲルマーニアである。獨逸民族が浮沈興亡の岐路に立つた時彼等が民族的理想を酌取つて自らを鼓舞激勵するものはこのゲルマーニアからである。かくもゲルマーニーを理想化する迄美化して書かれた本著は當時のゲルマーニーの敵たるローマの一家の手になつたものである。かゝる事實が如何にして可能となつたかを説明するのが本講の目的である。

一、一八九八年と一九〇〇年の獨逸海軍法

山脇重雄氏

一八九八年四月十日の海軍法

一九〇〇年六月十四日の海軍法

一、附屬文なし

附屬文あり

(獨逸は、最強の海軍國と雖も獨逸との戰爭が自國の優越的地位を危殆ならしめる如き危険を包含するだけの威力ある艦隊を持たねばならない)

一、艦數

艦隊旗艦

一隻

戰艦八隻より成る

二戰艦

海防艦四隻より成る

二分隊

二隻

四戰艦

なし

戰艦艦隊所 屬偵察艦	小巡十六隻	八隻
海外勤務用	小巡十三隻	三隻
豫備艦	小巡四隻	四隻
計(括弧内は起工を要する隻數)		38(11)
戰艦	19(7)	0
海防艦	8(0)	14(2)
大巡	12(2)	38(9)
小巡	30(17)	

一、期間(會計年度)
一八九八——一九〇三

本國戰艦艦隊は戰艦八隻より成る二戰隊を基幹とす

假想敵は佛露
目的は歐洲政策の擁護

一八九四年ティルピッツが起草した要務令第九號(Dienstverf. ten No. 9)の實現にして彼自身は一八七三年の計畫の再興と稱す

戰艦八隻より成る二戰隊二箇を基幹とす

假想敵は英國
目的は世界政策の擁護

一八九七年六月ティルピッツ海相就任當初の上奏内容の實現

一八九〇——一九一七

一、閉會の辭
地理學談話會

卒業生豫饌會 九月十六日(水) 午後六時より樂友會館に於て開催。參會者二十二名。

二回生歡迎會 十月十五日(木) 氣鋭の地理學專攻二回生十名を迎へて、午後三時から百萬遍かぎりに於て開催。參會者三十一名。

第十回地理學談話會大會 十一月二十二日(日) 午前九時より京大樂友會館に於て開催。左記の研究發表あり來會者六十名の盛會であつた。記念撮影に引續いて同館食堂における午餐會に移り遠來の先輩をも迎へて三十七名、なごやかな團欒にひときを過した。

- 一、閉會の辭 野間 講師師
- 一、南方水産開發問題 吉田 敬市氏
- 一、北太平洋の性格 小葉田 亮氏
- 一、日本神話に於ける國土 室賀 信夫氏
- 一、支那西北地域 (當日缺席) 米倉 二郎氏
- 一、世界の開展 宮川 善造氏
- 一、支那民族 藤田 元春氏
- 一、邦人の南方圈馴化に就いて 田中 秀作氏
- 一、閉會の辭 小牧 教授

地理學 專攻二回生 住友別子銅山見學報告

學制の變更に伴ひ十月より地理學を專攻と定め新學年を迎へた新二回生は總員十名、今や大東亞戰下新しき日本を主體とせる日本地政學の道に、學ぶ者の生甲斐を感じつゝその日その日の學業に精勵してゐる。

かゝる意氣の下恒例の秋の旅を戰下意氣あらしめん爲殊に選んで住友別子銅山見學と定めたのは目下世界に於いて貴金屬化しつゝあり、しかも共榮國內に於いてなほ充分の產出を見ぬ銅を日本一と稱せられる別子にてその採鑛、選鑛、製鍊にいか程の慎重さと意氣を以て統後産業を戰つてゐるかを現實の目にふれしめんと欲した爲であつた。

御多忙中の小牧教授に御引率を懇請し、室賀講師、教室の三上岡本、藤野諸氏及び大島三回生を加へた學生の八名が大阪天保山を那智丸にて出航したのは十月三十日の午後九時であつた。その夜は鶴多き瀬戸の夜の航行の困難をしのぶ可くブリッヂに立つて約一時間船長の話を拜聴した後は明日よりの見學に具へて熟睡した。

翌三十一日秋晴れの瀬戸内を賞でつゝ新居濱に着いたのは午前十一時、住友側よりの案内に導かれ住友鐵業會社に到り元祿三年より二百五十年の銅山經營の沿革をきく。午餐を住友俱樂部で馳走になりそれより直ちに各工場見學に移る。

○機械選鑛工場 銅山にて採掘された鐵石の篩別の際、篩下の

粒粉鐵及び貧鐵を當所にて比重選鑛法により硫化粒粉鐵を選別し更に浮游選鑛法を以て浮游銅精鐵を選別する。人影も無い暗い工場内で黙々と各機械は己が全能力を發揮してゐる。こゝに於いて選別せられたるものが直接四飯島に送られるのである。

○電鍊工場 四飯島で產出されたアノード板を電氣分解に附し電氣銅、金、銀、副產物として丹麥、硫酸ニッケル、セレンニウム白金、パラザウムを產出する。共に戰下重要な資源となるものである。

○化學工業工場 之は元來銅山にて產出する硫化鐵鐵を以て硫酸を更にそれより過燐酸石灰を製造し販賣せん爲に作られたものである。かく付加的に初まつたこの工場も化學肥料、アンモニヤ更にアルミニウム原料たるアルミナを生産し得る故に擴張に擴張を重ねて現下に至つた。

以上三社夫々懇切なる説明、案内により吾々は大きいに得る所があつた。夕餉か、銅の地盤かはた又紅葉の爲か眞赤に色づけられた銅山を眺めつゝ住友經營泉壽亭に入つたのは日も落ちんとする頃であつた。行き届いたサービスに前日の疲れも癒えて翌一日早朝採鑛場へと向ふ。

○端出^{ハヅレ}場採掘場 第四通洞より水平一直線に山中に入る事五千米山頂よりは約一千米の下に當る。現在採鑛中心地たる端出場に到れば濕度温度共に高く健康には最悪なりと思はせられる。そこに於いて鑛夫は早朝家族の者に送られて坑道に入つてより幾多の危険をも顧みず鑛山選士としての重責に耐へず暇を惜しんで採鑛

に専念してゐる。それは坑夫の目の色、動作、更には坑内に貼りつけある「トウチヤン元氣でタレントホレ」の愛しい吾兒の激勵の語を見て、もわかるのである。神ながらの日本はかくして強いのである。

四阪島には向はん爲急ぎ新居濱港に歸る。船中にて菰食を攝るや間もなく四阪島である。

○四阪島製鍊所 もと銅山の中腹東平トウヘイにあつた製鍊所は採掘が深まるにつれその頃より坑道にて新居濱にもたらされそこにて製鍊される事となつた。しかし附近に與へる煙害の爲更にわざわざ四阪島迄持つて行かねばならなかつた。豫期に反して煙害は薄いと云へ一層廣範圍に亘り損害賠償金年數萬圓を費す事となつた。しかし日本科學の方はこの亞硫酸瓦斯の大部分を回收して硫酸アンモニヤ及び亞硫酸ソーダに轉化する中和工場の設立に成功した。こゝに於いて煙害問題は全く解決した。製鍊工場に於いては熔鑛爐の偉大さと溶銅に男性的な氣魄に打たれた。ここでは機械の世界である。絶對的な自然に對する様に人間の無力ささへ感ぜしめる。この機械が人間の作なる事さへ疑はしめて。

四阪島は全島住友系以外の者を交へず經濟的にも地理的にも面白い對照となりうると感ぜられた。

この四阪島を最後に別子銅山の見學は終つた。この見學中感ぜられた事は産業選士が住友様の爲にと働いて來た祖先の血が今や其まゝ日本帝國の爲と云ふ固い決意に代つて來てゐる事である。そしてそれに答ふる可く住友が立派な厚生施設で勞をねぎらつて

ゐるのは限り無き喜びを感じしめる。別子はその歴史に反比例して若返りつゝある。なほ銅山及び諸工場の設立關係に經濟地理的な眼をそゞげばそこに又多大の問題の存するのを察知しうる。

かくて一行は今治へと渡り一路松山道後温泉へと急いだ。その夜は野澤先輩の來訪あり二日間の見學の最後の夜として實に楽しいものであつた。萬葉よりの歴史を誇る温泉につかる事數回、意義深かりし旅行の疲れを安らかな夢に解いて翌二日早朝小牧教授の歸洛を見送りこの旅行は解散となつた。(平松健次記)

考古學談話會

九月十日(木曜日) 午後三時よりかき屋階上に於いて卒業生豫饗會を兼ねて例會を開催、梅原教授、村田・小川兩講師以下出席井上、及川兩氏それぞれ卒業論文の梗概を述べ、梅原教授それに就いての感想談あり懇談に入つて五時閉會した。

十月二十七日(火曜日) 午後一時より文學部陳列館内考古學實習室に於いて新學年秋季例會を開催、梅原教授、小川講師以下十四名出席、左記四氏の研究發表並に紹介に時局下學徒の烈々たる意氣を示した。終つて會場をかき屋に移して茶菓を喫して懇談、感會であつた。

一、關東州史前遺跡に就いて

澄田 正 一氏

去る九月末から十月に互つて行はれた日本學術振興會の關東州文家屯具塚發掘調査に参加中の感想の一斑を紹介された。即ち、

遺物としては遺跡の性質上大したものは無かつたが、それでも昨年調査した同郭家屯の石塚との並行を證明する玉製品薄手良質の黒陶及び黒陶遺跡に伴出する鐵の存在が認められ、殊に黒陶には磨滅に依り之が日常使用の器であつたことを示すものを含み、又赤色磨研土器の出土が注意せられたと。而して是等から關東州史前土器は大體五つの型に總括出來て何れも黒陶系であるが、この遺跡から本格的な良質の彩陶が亦この地にも及んでゐたことが推されることを指摘する所があつた。

一、越中北代蝦夷貝塚發掘談

藤岡謙二郎氏

今夏實施せられた富山縣婦負郡長岡村北代蝦夷の貝塚の發掘に就いて寫眞並に採集遺物を展示して説明せられた。土器は羽狀繩紋のもので中に纖維を含むかと思はれるものがあり、石器は通有な蛇紋岩磨製石斧の外五分内外の小形石斧もあり、その他石鏃、骨角製品などが見られた。最後に木遺跡がシヤミを中心とする貝塚である點に於いて地形發達史上乃至は先史地理學的に興味あることに就いて所見を述べられた。

一、東舞鶴の古墳調査

小林行雄氏

遺跡は通有の横穴式石室古墳で、遺物としては視部土器のほか直刀、同鏃、銀鏃、勾玉、鐵鏃などがあつた。調査の結果棺は木棺であつたらしく其の一つの墓は一度埋葬した後或時日を経て土を入れ二度目の埋葬の行はれたこと、また埋葬にあつては石室

内でものを煮炊きする一種の儀式のあつたことなどを推し得る形迹が認められたと。

一、朝鮮に於ける最近の發掘に就いて

梅原敬授

左の五項目に互る興味深き示唆に富んだ紹介があつた。即ち第一は平安南道中和郡東頭面眞坡里東明王陵附近に於いて朝鮮では珍しく住居址の發見されたこと、そのプランは大體矩形であつたと。第二は平壤府外秋乙美面將泉里に於ける銅劍その他の鋒範の發見、第三は樂浪古墳今年春季の發掘中最も著しいものとして石叢里第二一九號墳につき美事だ寫眞を示しての解説で、それは周圍をスレートで圍んだ木槨墳に屬し、槨室は二部に分たれ、各部に二重の木棺を藏置してその一方から王根信印なる印文の龜鈕銀印が存し、副葬品として蓋椀、馬具、鏝の小札など夥しい遺物の外木製明器なども檢出されたが、中に銀製の北方ユーラシヤ大陸を經た西方の色彩の濃厚な金具の存在が特に注意を惹いたと言ふ。第四は慶州皇福寺塔に於ける新事實に就いて、また最後は扶餘に於ける瓦甕甌並に所謂四天王寺式伽藍配置の寺址の發見に就いて解説があり、殊に後者に於いて二重基壇や壁畫斷片などが見出されたと言ふ注目すべき新事實を示された。(及川幸夫記)

會報

◇會員動靜

◇入會

- 京都市左京區北白川葛町御蔭寮
- 同 下鴨西梅ノ木町四 水間方
- 同 墨谷町三〇 顯慶院內
- 同 聖護院東町九ノ二 所方
- 同 上京區小山西上總町四一
- 同 河原町今出川下九 梶井町四四八
- 吳石 喜一氏
- 大西 青二氏
- 森 和夫氏
- 三吉 希氏
- 高橋 博氏
- 山下方
- 樂千代三郎氏

(以上六氏、外山軍治紹介)

◇轉居

- 靜岡市西千代田町一一四
- 小林 義武氏

◇寄贈交換圖書

- 「公家文化の研究」(小島小五郎著)
- 國民精神文化 八ノ八、九
- 國學院雜誌 四八ノ八、九、一〇
- 國語・國文 一一ノ一〇、一一
- 「古寫經綜覽」(田中塊堂著)
- 育 芳 社
- 國民精神文化研究所
- 國學院大學雜誌部
- 京都帝國大學文學會
- 鶴 故 郷 舎

- 史 苑 一四ノ四
- 史 學 二一ノ一
- 史 學雜誌 五三ノ九、一〇
- 史迹と美術 三ノ九、一〇
- 「神祇教育と訓練」(大倉邦彦著)
- 人類學雜誌 五七ノ九、一〇、一一
- 斯道文庫報 一〇、一一
- 社會經濟史學 一二ノ六、七
- 「肇國紀傳」(武田祐吉著)
- 中央文化研究會々報 三三、三四
- 哲學研究 二七ノ九、一〇、一一
- 東洋史研究 七ノ四
- 東方學報 東京一三ノ二
- 長崎叢談 三〇
- 文化 九ノ八、九、一〇
- 「藤原京」(喜田貞吉著)
- 北方文化研究報告
- 蒙 古 九ノ九、一〇、一一
- 歷史學研究 一二ノ一〇
- 歷史地理 八〇ノ三、四、五
- 〔遼 陽〕 滿洲古蹟古物名勝天然記念物保存協會
- 立教大學史學研究室
- 三田史學會
- 史 學 會
- 史迹美術同致會
- 明 世 堂
- 日本人類學會
- 斯 道 文 庫
- 社會經濟史學會
- 明 世 堂
- 中央文化研究會
- 京 都 哲 學 會
- 東洋史研究會
- 東方文化學院
- 長崎史談會
- 東北帝大文學會
- 鶴 故 郷 舎
- 北 海 道 帝 大
- 善 隣 協 會
- 歷史學研究會
- 日本歷史地理學會